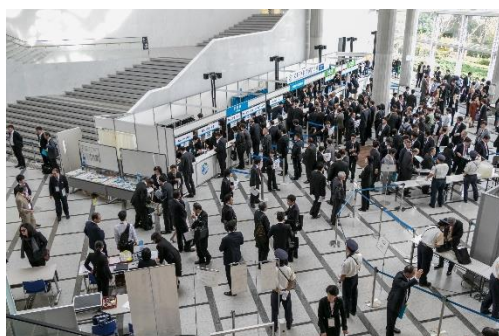


◆ 開会式

秋篠宮同妃両殿下の御臨席、国土交通省、農林水産省、環境省及び共催 6 市・町長等の御来賓を頂き、開会式が行われました。

主催者として、茨城県の大井川和彦知事、ILEC の竹本和彦理事長の挨拶の後、秋篠宮殿下並びに、来賓の方々よりご祝辞を賜りました。

その後、前日開催された学生会議に参加した小中高校生代表から総括報告が行われ、小学生代表の稲敷市立浮島小学校の黒田里瑚さんからは、「環境活動の回数や仲間を増やし、湖沼の恵みをたくさん感じてその恵みをみんなに伝えていきたい。」などと報告があり、会場から大きな拍手がありました。



◆ 基調講演

茨城大学の三村信男学長による、地球環境の変動と湖沼の未来についての基調講演が行われ、湖沼の持続的な管理に重要な事項として、

①湖沼生態系は人類の生存基盤であるため、それぞれの湖沼で地域に合った賢い利用の道を考える。

②湖沼の持つ生態系サービスの潜在力を最大限に発揮する。

③統合的湖沼流域管理を推進する。

④科学的データと情報に基づく管理をする。

を挙げました。



◆ 湖沼セッション（国外湖沼）

オセアニア、アフリカ、ラテンアメリカ各地域から 3 名の専門家が、湖沼流域管理の取組の現状と課題について事例を発表しました。メキシコの Alejandro Juarez 氏は、「メキシコのレルマ・チャパラ盆地の統合管理の課題」としてチャパラ湖の情報が意思決定者と住民に十分認識されていない現状を訴え、主要データの充実、情報への住民アクセス、パートナーシップの構築・強化という取組について紹介しました。

続いて、中村正久 ILEC 副理事長の司会のもと、アジア・北米地域のコメンテーターも加わり、パネルディスカッションが繰り広げられました。



◆ 政策フォーラム

世界湖沼会議企画推進委員長である松井三郎氏のコーディネートのもと、茨木県知事、各省庁や、海外の政策責任者による取組事例や課題などの紹介ののち、パネルディスカッションが行われました。

霞ヶ浦の事例として、周辺に養豚場が多く、畜産業への排水対策や、小規模事業所への罰則強化、葦の人工的生成などが挙げられました。また、環境省や農林水産省からの発表には、シジミに関する琵琶湖での水質調査のモデル事業や、近江八幡市のよしきりの池での水質保全活動、魚のゆりかご水田を参考とした取組の紹介が挙げられました。

パネルディスカッションでは、“連携”をキーワードとして、討論がされ、UNEP の Keith Alverson 氏からは、他の国連機関との連携はうまくいっているが、これからは一般市民との連携が優先されるとの意見が、またバラトン湖開発評議委員会の Gábor Molnár 氏からは、「昔より水質に対する意識は高まっているが、水の管理は3つのセクターに分かれているため、それらを統合し、資源の取り合いにならないようにしていきたい」など、皆が一様に、連携の重要性を訴えました。



◆ 湖沼セッション（国内湖沼）

湖沼環境問題解決に向けて、流域内連携や流域間連携を推進するために、国内の主要な湖沼流域の市民、行政、研究者及び企業等が活動内容や施策等について討議しました。

NPO 法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）の尾崎昂希氏は、琵琶湖の特定外来生物であるオオバナミズキンバイの急激な増殖という問題に対して、「学生の力で琵琶湖を守りたい」との思いから始まった除去活動について紹介しました。



◆ 霞ヶ浦セッション

霞ヶ浦における流域内連携を推進するために、県政、国政、農業、漁業、観光業、市民団体などの代表者が集い、霞ヶ浦の抱える様々な課題を共有し、持続可能な生態系サービスに向けた取組について事例発表とパネルディスカッションを行いました。



◆ 分科会

研究者や市民団体等が 9 つの分科会において論文や活動成果の発表及び討議を行いました。

ILEC 科学委員長の Walter Rast 教授は、「国境にまたがる湖沼と貯水池に対する脅威評価」として UNEP と ILEC 他が共同で行った水系状況について直面する脅威の種別と重大さに関するランキング評価のシナリオ開発とともに、その感度分析等、脅威に対する管理介入の可能性を示しました。

また、インドのチリカ湖ナラバン鳥類保護区の事例として、Ajit Pattnaik 氏は、2011-14 年間の研究により、保護区が提供する生態系サービスへの役割を示すことで、漁業に大きく貢献していることが理解され、地元漁民の認識が変わり、対立を解決へと向かわせた事例を発表しました。



◆ エクスカーション

➤ 霞ヶ浦コース

[内容]

霞ヶ浦周辺の国や県の環境関連施設等の現地視察を行い、霞ヶ浦の生態系サービスに触れ合うとともに、霞ヶ浦の水質浄化に係る取組を学びました。

[視察場所]

石田湖岸（土浦市手野）

自然再生事業 B 区間（土浦市田村町）

自然再生事業 H 区間（土浦市沖宿町）

川尻川ウエットランド（かすみがうら市戸崎）

茨城県霞ヶ浦環境科学センター（土浦市沖宿町）

茨城県流域下水道事務所霞ヶ浦浄化センター（土浦市湖北）

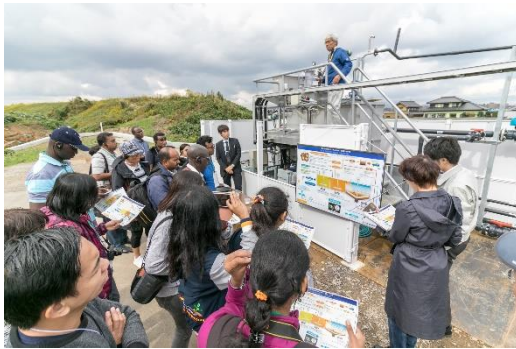
霞ヶ浦直接浄化実証施設（土浦市湖北）

茨城県企業局霞ヶ浦浄水場（土浦市大岩田）

[参加者数]

外国人 89 名

日本人 40 名 計 129 名



➤ 北浦・涸沼・千波湖コース

[内容]

ラムサール条約湿地に登録された涸沼に係る関係機関の取組を紹介するほか、北浦、涸沼及び千波湖の視察を行いました。

[視察場所]

北浦北部周辺地域（銚田市安塚）

いこいの村涸沼（銚田市箕輪）

涸沼自然公園（東茨城郡茨城町中石崎）

千波湖（水戸市千波町）

那珂機場（霞ヶ浦導水事業）（水戸市渡里町）

[参加者数]

外国人 110 名

日本人 15 名 計 125 名



◆ 会議総括・閉会式

各セッションの代表者による総括の発表ののち、閉会式が執り行われました。主催者として、大井川茨城県知事の挨拶の後、茨城県県民生活環境部長の齋藤章氏より、「いばらき霞ヶ浦宣言」が朗読されました。宣言には、湖沼が有する生態系サービスを衡平に享受すること、生態系サービスを次世代に引き継ぐことが重要であるとし、各個がどのようにすべきかが提言されました。

また、次回の湖沼会議は 2020 年メキシコのグアナファトで開催とアナウンスされ、グアナファト大学の Sergio Antonio Silva 氏による、参加への呼びかけとプロモーション映像が流されました。

また、Walter Rast ILEC 科学委員長からは、14 日に開催した国際コロキウムについて報告があり、この成果物を公開し、皆の意見を伺いたいと述べ、この会議のテーマでもある、湖沼問題を主流化する事の重要性を再度強調しました。さらに、WWF9（第 9 回世界水フォーラム）が 2021 年 2 月頃セネガルで開催されるので、ここでの湖沼の扱いがより大きいものになるよう働きかけると述べました。最後に ILEC の竹本理事長から閉式の辞として、全ての関係者へのお礼とともに、ここでも、湖沼を水問題のメインストリーム化に向けて動くこと、次回メキシコでの会議での再会を約束し、閉式となりました。

